

安全学の潮流

国際医療リスクマネジメント学会 会長・理事長
酒井亮二

世界において安全学には以下のような複数の学問が存在し、それぞれに巨大な国際学会が存在しております。

ヒューマンファクターズと品質管理学 イギリスが発祥地
リスク学 ... ドイツが発祥地
安全心理学と安全行動学

第2次世界大戦後のイギリスのチャーチル首相は航空産業のビジネス化を目指して、墜落事故の起きない飛行機の技術的安全のために、技術の品質向上を国家スローガンとしたことによって、品質管理学は本格的に稼働しました。他方、戦後の日本では産業化推進の国家基本戦略として、産業界の品質管理に注目しました。その結果、1980年代に日本製品は世界一の品質を有するようになり、各種の日本製品がアメリカ製品を驚愕するに至りました。この事実に着目したハーバード大学医学部は医療安全に品質管理学導入の旗振りを行っている次第です。

リスク研究はドイツで発祥し、リサイクルをドイツでは100年以上前に社会実験を行っています。米国では1970年代になって、ハーバード大学にリスク分析センターを米国政府の肝いりで設立されました。敗戦国ドイツから様々な学芸の移植を目指したアメリカでは、ドイツ流の安全学も輸入した経緯でした。米国で開花したリスク学は、1980年代に米国では以下の5大要素の循環モデルが議決されています。

- 1) リスク同定 何が問題か
- 2) リスク評価 被害度と原因の調査、
- 3) リスク管理 国民が満足する許容リスクの策定。許容リスクを実現する方法の策定。
対策の経済効果の導入。
- 4) リスクコミュニケーション 策定したリスク管理を周知させる。
- 5) フィードバック 施行したリスク対策の実効性を評価して、許容リスクに達しない場合、更に2)の原因を調査する

このように複数の安全学はそれぞれに長所と短所があり、安全性向上には複数の安全学を融合することが現実的です。

しかしリスク学は事件発生以前に対する考え方で、全職員参加型の予防活動である。したがって、事件発生後はクライシス学が必要ですが、クライシス学でもリスク学の5大要素が存在すると容易に考えられます。クライシス対応は特定の小集団対応型です。これらから、下記の安全基本プラットフォームを考えるに至りました。

